阿波の御狸様
―伝説の文化力と観光資源への開花・結実―

徳島経済研究所技術顧問　工学博士
西　池　氏　裕

第１章　地域の文化力

地域が持つ「文化力」は、性格的に二面性を有する。一方は経済的側面である。文化財や文化資本という語が示すように、文化は経済的価値を生みうる「資源」である。観光・産業・ブランド形成など、外部に向けた発信力として機能する。もう一方は精神的側面である。地域で生活する人々の幸福感に関わり、郷土愛や共同体意識、生活様式の形成に寄与する。これもまた、地域社会を支える重要な資源である。

本論では、これら二面性を踏まえつつ、文化力の有する「地域が持つ物語・記憶・象徴を資源化し、共有し、発信する力」という機能的定義に着目して議論を進めたい。

地域には、歴史・伝統・教育・習慣・芸能・生活文化など多様な文化的資源が存在する。しかし、それらの多くは無形であり、定量化が難しい。経済的側面は観光客数や市場規模などの指標で測定しやすいが、精神的側面は「幸福度」や「住んでみたい場所ランキング」のように定性的な比較に頼らざるを得ない。本論では、定量・定性の両側面を含めて総体的に「文化的資源」「文化力」と呼ぶことにする。

徳島県は、この文化力を考える上で格好の事例が存在する。「阿波おどり」は単なる郷土芸能を超え、徳島の象徴的ブランドとして国内外に広く認知されている。「藍」は伝統産業であると同時に、クラフト・ファッション・観光の領域で新たな価値を獲得しつつある。「人形浄瑠璃」は無形文化財としての歴史的価値を保持しながら、教育・観光・舞台芸術の分野で再評価が進む。さらに近年では「マチ★アソビ」が、若年層の文化消費と地域イベントの新しい形を提示し、都市型文化のブランドとして定着してきた。これらはいずれも、地域に埋蔵されていた文化資源が適切に育成され、社会的価値として開花した結果である。文化資源が文化力として結実する典型例と言える。

無形の文化財は、自然発生的に開花するものばかりではない。多くの場合、埋蔵文化財を発掘するように、人々が意識的に企画し、育成し、継承し、外部に向けて発信することで初めて文化力として結晶する。文化は「あるだけ」ではブランドにならない。地域の「物語」を編み直し、現代的文脈に接続し、観光・教育・産業と連動させることで、文化資源は社会的価値を獲得するのである。ここでいう「物語」とは文字通りにその地域を語りうる伝承や小説を指すだけでなく、地域にまつわるストーリー性ともいうべき概念である。

この観点から見ると、徳島県に豊富に存在する伝説・狸譚は、「高い文化力（ポテンシャル）を有する無形の文化財」であると言える。金長狸をはじめとする狸伝説は、地名・社寺・民俗・文学・祭礼など多層的な文化要素を内包し、物語性・親しみやすさ・視覚的モチーフの豊かさを備えている。現在、徳島ではこの狸文化力を活かすべく多様な活動が展開され、一定の成果を上げている。しかしそのポテンシャルは、阿

波おどりや藍に匹敵するほど大きく、今後さらに高みを目指しうる資源である。

本論考は、開花途上にある文化資源としての狸譚（たぬきばなし）に着目し、その実態を多角的に考察することで、「狸ブランド」「狸王国」としての再構築可能性を提唱するものである。それとともに文化力における「物語性」の重要性をも喚起したいのである。

第２章　伝説とは何か：概念・構造・現代的価値

2-1　伝説・民話・神話・縁起・都市伝説の違い

伝説は特定の場所や集団に根ざした語りであり、事実性と虚構性が混在する点で神話・民話・縁起・都市伝説等と明確に区別される。神話が世界観や起源を説明する体系的物語であるのに対し、民話は生活世界に根ざした教訓や娯楽を担う。縁起は特定の事物や場所の由来を説明する因果的語りであり、都市伝説は現代のメディア環境で拡散する匿名性の高い語りである。伝説はこれらを総合した位置にあり、地域固有の記憶と想像力を媒介する柔軟な物語形式である。

2-2　伝説の機能の変化

伝説は本来、共同体の記憶装置として過去を保存し、無形の境界を再確認する役割を担ってきた。しかし現代では、教育的・教化的機能を保持しつつ、娯楽性を伴って世代や地域を越えて伝播する。さらに観光資源化が進むと、伝説を含む地域の物語は経済的価値を帯び、来訪者との共感を媒介するブランド資産となりうる。伝説は「伝えるもの」から「活用されるもの」へと機能を拡張しつつある。

2-3　日本の伝説の多層構造（神話層〜現代創作層）

日本の伝説は、神話層・民間信仰層・口承層・近代再話層・現代創作層という多層構造を持つ。各層は独立して存在するのではなく、相互に影響し合いながら再編され続ける動態的構造を形成している。

神話層は地域の起源や世界観を支える基層として機能し、民間信仰層は生活世界に根ざした実践を通じて物語を具体化する。口承層は語り部や地域住民による伝達を通じて物語を更新し、近代再話層は文学・郷土史・観光パンフレットなどの媒体によって物語を編集し直す。現代創作層はマンガ・アニメ・イベント・キャラクター化などを通じて新たな意味を付与し、伝説を現代社会の感性に接続する。

現代創作層の重要性は特筆すべきである。これは「新しい伝説の創造」を意味し、古い物語が現代の文化消費の文脈で再解釈される現象を含む。たとえば、東京・数寄屋橋はラジオドラマ「君の名は」（1952 年、菊田一夫）によって象徴的な場所となり、映画化や「真知子巻き」の流行を通じて社会現象化した。橋自体は高速道路建設に伴い撤去されたが、「数寄屋橋 此処にありき」の碑が残され、現在では一種の「聖地」として記憶されている。現代の若者が行う「聖地巡礼」は、この現代創作層が生み出す新しい伝説の典型例である。

余談であるが、「君の名は」のラジオ番組が始まる時間になると「銭湯の女湯から人が消えた」といわれるほどであった。このエピソードは映画会社の宣伝による虚構だという説もあるが、一種の社会現象となった。番組冒頭のナレーション「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却を誓う心の悲しさよ」は様々な場面で引用され、高齢の方であれば今でも覚えているのではないだろうか。これは「物語性」やストーリー性の重要性を示す好例である。

この多重構造は、地域文化力の源泉としての伝説の強みである。複数の層が重なり合うことで、伝説は多様な解釈可能性と再利用性を獲得する。行政・観光・教育・産業など異なる主体が、それぞれの層を参照しながら物語を再構築

できるため、伝説はブランド化に向けた柔軟性を持つ。また、時代ごとの問題意識を取り込みながら意味が変容するため、伝説は「古い資源」でありながら常に「新しい価値」を生み出す潜在力を保持する。地域文化力とは、この多層的な物語構造が社会的価値として開花した状態である。

2-4　伝説の現代的価値（地域文化力との接点）

以上をまとめると、現代における伝説の価値は、単なる遺産保存を超えて地域文化力の源泉となる点にある。物語を軸にしたブランド化は観光振興と地域アイデンティティの強化を両立させ得るが、同時に伝承の改変や商業化に対する地域内合意形成が不可欠である。伝説を活かすとは、意味の保存と創造的改変をバランスさせる営為であり、地域文化の持続的発展に寄与する創造的な資源を生み出す取り組みである。

第３章　狸伝説の文化力（徳島県の狸伝説とその展開）

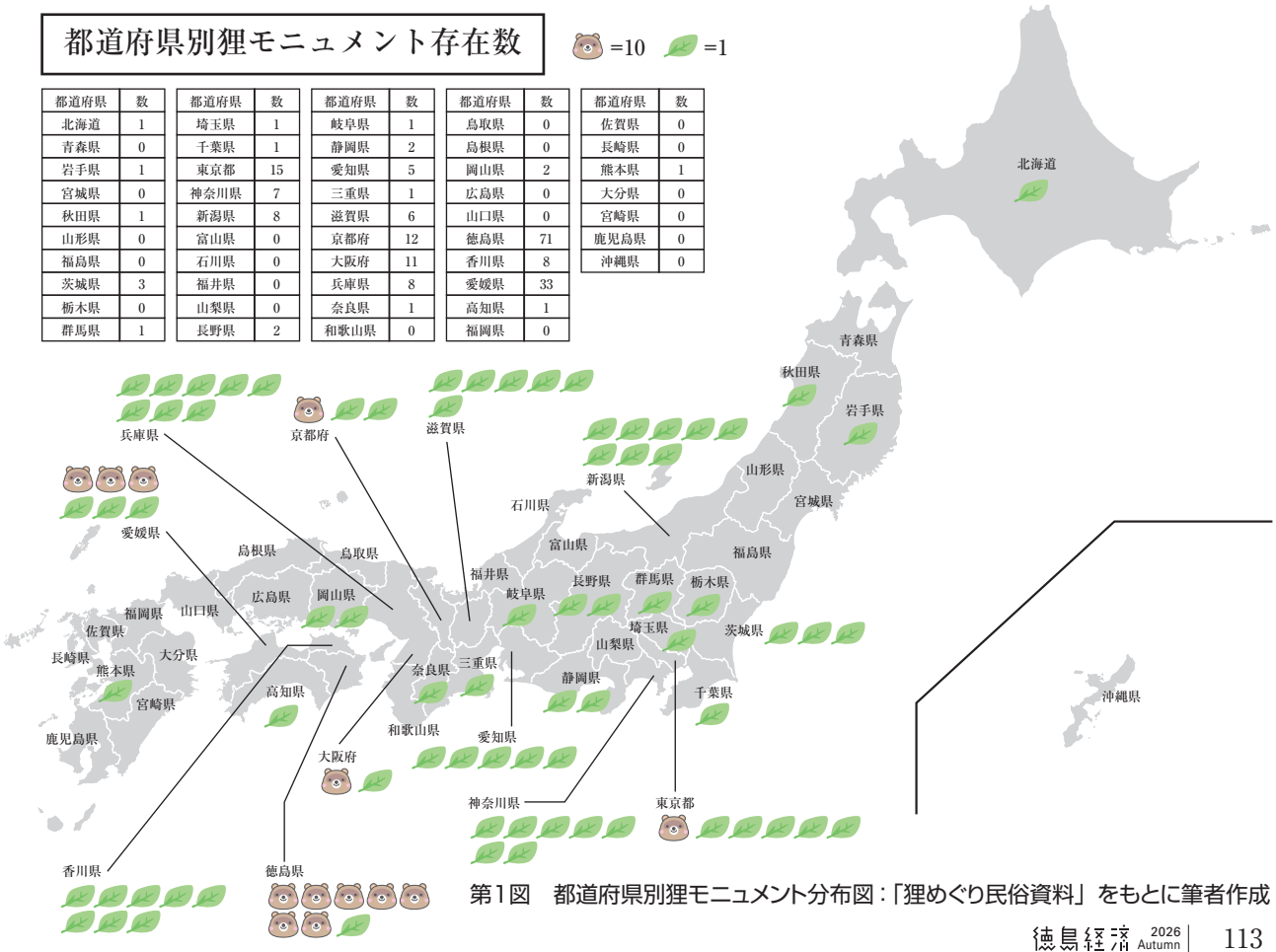
3-1　日本における狸伝説

3-1-1　狸伝説とは

伝説などはその地域に根差すところが大きいため、その地域特有の無形の文化力ならびに文化財である。「狸」はまさに徳島県ならではの無形の文化力と言ってよい。

● 全国の狸伝説

学術的にきちんとした統計ではないが、全国の狸伝説の関心を示す指標となりうるデータがある。辻正幸（愛知県の狸愛好家）が自身の足で収集した「狸めぐり民俗資料」という調査記録（※参考文献）によれば、狸を祀る神社･寺･祠・像等（以下「狸モニュメント」と表記）が全国で 204 件採録されている。そのうち徳島県が 71 件と最も多く、次いで愛媛県 33 件であるとされる。両県だけで約 5 割を占めるというこの分布は、四国における狸文化圏の強さを示す重要な指標となる。徳島の狸伝説は量的にも質的にも突出しており、固有名の付与や祀りの形態が多い点で特徴的だ。そのことからも徳島は



都道府県	数
北海道	1
青森県	0
岩手県	1
宮城県	0
秋田県	1
山形県	0
福島県	0
茨城県	3
栃木県	0
群馬県	1

都道府県	数
埼玉県	1
千葉県	1
東京都	15
神奈川県	7
新潟県	8
富山県	0
石川県	0
福井県	0
山梨県	0
長野県	2

都道府県	数
岐阜県	1
静岡県	2
愛知県	5
三重県	1
滋賀県	6
京都府	12
大阪府	11
兵庫県	8
奈良県	1
和歌山県	0

都道府県	数
鳥取県	0
島根県	0
岡山県	2
広島県	0
山口県	0
徳島県	71
香川県	8
愛媛県	33
高知県	1
福岡県	0

都道府県	数
佐賀県	0
長崎県	0
熊本県	1
大分県	0
宮崎県	0
鹿児島県	0
沖縄県	0

第１図　都道府県別狸モニュメント分布図：「狸めぐり民俗資料」をもとに筆者作成

狸王国と言える。

第１図はそのデータをもとに各県ごとの件数を著した図である。図から読み取れるのは、「狸モニュメント」が多いのは東京や京都など大都市を有する地域であるという点だ。しかし、これはある意味で当然とも言える。

これに対して徳島は、東京・京都・大阪・神奈川のような大都市が存在していないのにもかかわらず、非常に「狸モニュメント」が多い。この背景には、有名な伝説である「阿波の狸合戦」の浸透が大きいと考えるのが自然ではあるが、他県において有名な狸伝説が存在する地域にモニュメントが多いかというと、必ずしもさほどではない。

例として有名な「文福茶釜」（群馬県館林市・茂林寺）は茶釜に化けた狸が曲芸を披露する話であり、茂林寺には狸像群があって有名だが、他の群馬県内の「狸モニュメント」は記録されていない。

また「証城寺の狸囃子」（千葉県木更津市）は童謡「証城寺の狸囃子」によって全国的に普及しており、証城寺境内には狸像が多数あるが、ここも県内には１件の報告のみである。

また「カチカチ山」（場所不詳の昔話）は日本のおとぎ話の代表的なものである。狸と兎が登場するこのおとぎ話の筋書きは説明するまでもないが、おとぎ話としては三つの要素が合わさって成立したとされる。第一に人間に悪戯をする動物が捕らえられる話、第二に捕らえられた動物が知恵で人間から逃げる話。第三に動物同士の争いの話である。ウサギは知恵者、人間の味方として描かれ、タヌキは他の昔話や民話でもそうであるように、人間をだます者・人間を化かす者として描かれる。平安時代からすでにみられる、キツネ・タヌキ・ムジナを人間や地蔵、物に化けて人間を困らせる存在として描く類型のひとつである。

少し余談になるが、「カチカチ山」は室町時代末期には現在の形で成立していたとみられている。かつ、この話はその残酷描写や復讐の構造をめぐって、道徳的・教育的観点からしばしば議論の対象となってきた。特に、狸が背負った薪に火をつける場面や、泥船で溺死させる結末は、近代以降の児童教育の場で「過度な報復表現」として批判されることがあった。一方で、善悪の明確化や因果応報の理解を促す物語として肯定的に評価する立場も根強く、社会道徳の教材として扱われることも多い。こうした二面性が、「カチカチ山」の物語を長く議論の対象としてきた理由である。

本論の文脈でいえば、「カチカチ山」の狸は有名である割には、「当地の狸でございます」と名乗り乗り出る「引受先」がないのかもしれない。

なお、お伽草子で太宰治は「カチカチ山」の舞台を河口湖に、「瘤取り（こぶとり爺さん）」は阿波の剣山を割り当てている。

● 徳島県の狸モニュメント

「狸モニュメント」の数からいって徳島はまさに狸王国である。狸伝説の有形の表れである「狸モニュメント」は県内に広く分布している。とくに吉野川流域に沿って伝承が集中する傾向があり、川と山が織りなす地形が物語の舞台を育んできたことがうかがえる。伝承の多くは単なる「昔話」ではなく、祠や社、石碑、などの有形のもの、さらには地域の祭礼と結びつき、信仰の対象として扱われてきた例が多いのが特徴的だ。だが信仰だけで説明がつくのだろうか。興味深いのは、徳島では狸に固有名詞が付され、個別の「キャラクター」として語られることが多い点である。金長狸のように固有名を持ち、神社や像で祀られる例が目立つのは、地域住民が狸を単なる動物以上の存在として受け止めてきた証左である。それは伝説が物語性に裏付けられていることに起因しているのではないか。伝説も同様であるが、無形文化財は物語性を獲得することで文化力が増大すると考えている。

3-1-2　狸譚の類型――四つの基本型と怪異の細分類

一口に狸ばなし（譚）といっても、狸に対する人間の関心は種々であり、その多面的な性格が人間と狸の関係を強めていると考えられる。まずは大きく四つの類型に整理できる。

- **第一に善玉型**――狸が人々を助け、守り神的役割を果たす物語。
- **第二に物語（狸合戦）型**――狸同士の勢力争いを描く大叙事詩的な伝承。
- **第三に報恩型**――恩を受けた狸が人間に報いる話。
- **第四に怪異型**――人を化かす、奇怪な現象を引き起こす話。

怪異型はさらに細分できる。代表的な現象は、(1) 人まね・物まね（人声や物音を真似る）、(2) 小豆洗い・狸の嫁入りのような夜間の奇観、(3) 狸憑きといった人間側に影響を及ぼす事象である。

小豆洗いや狸の嫁入りは視覚・聴覚に訴える「見世物的」怪異で、旅人や夜間通行者の語りを通じて広がる。一方、狸憑きは病や不調の説明枠として機能し、民間信仰や祈祷の対象となることがある。むしろ市街地を離れると怪異型が主流である。例えば「妖怪村」として売り出し中の三好市山城町にも、たぬき話が多い。

3-1-3　語り手と継承のかたち

伝説は語り手によって形を変え、保存される。徳島では地域住民の口承が基盤にあり、寺社や氏子、郷土史家が記録化・体系化を担ってきた。近年は観光団体や行政が祭礼やイベントを通じて伝説を「地域資源」として再編集するケースが増えている。語り手の交代は内容の変容を招く。たとえば、かつては地域の信仰に根ざしていた金長狸の物語が、現代では観光キャラクターや土産物のモチーフとして流通するようになったのは、語り手の役割変化を端的に示す事例である。

3-2　阿波は狸伝説王国

3-2-1　狸の物語性が生む文化力

徳島県、とりわけ徳島市から鳴門市ならびに小松島市にかけての地域は、全国的に見ても狸伝説の濃密な分布を示す。祠や石碑、狸像が市街地の随所に残り、地域住民の生活の身近に「狸」が息づいている。なぜ徳島にはこれほど多くの狸モニュメントが存在し、生活文化として根付いているのか。その最大の理由は、阿波狸合戦伝説の強い物語性と普及力にある。

物語が広く共有されることで、狸は単なる動物ではなく、地域の歴史・地名・寺社を結びつける象徴的存在となる。徳島の狸は、妖怪として恐れられる存在でも、憑依の怪異の主体でもなく、むしろ地域の地名や歴史と結びついた「物語の主人公」として扱われてきた。一般論として、伝説のような無形文化財が広く流布するには物語性の強さが不可欠である。徳島の狸に固有名詞が付されるのも、この物語性の高さに由来する。

阿波狸伝説の象徴が、小松島市内（旧徳島藩領内）に鎮座する金長神社である。ここに祀られる金長狸は、徳島の狸文化を代表する存在であり、地域の物語性を牽引してきた。金長狸は「善玉型」の狸として知られ、人間に恩返しをする報恩譚の主人公であると同時に、後述する「阿波狸合戦」の中心狸としても語られる。境内には金長狸像や絵馬が並び、祭礼や観光事業にも取り入れられている。こうした「物語の主人公としての狸」が、徳島の狸文化を他地域と比べて際立たせている。

徳島の狸には固有名詞が多く付されるが、これは民俗学的にも「物語性が強いほど固有名詞が生まれやすい」という傾向と一致する。金長狸、六右衛門狸、太三郎狸など、名前を持つ狸たちは地域の語りの中で役割を与えられ、物語の中で生き続けてきた。

阿波狸合戦は、金長狸と六右衛門狸が覇権を争ったとされる狸世界の大合戦であり、徳島市内や小松島市の地名と密接に結びついて語られ

る。物語はおとぎ話風でありながら、地域の地勢や寺社の位置を巧みに織り込み、聞き手に「自分の住む場所で起きた出来事」であるかのような臨場感を与える。近年はこの伝説を知らない人も増えているため、以下にその概要を紹介する。

3-2-2　阿波狸合戦――地名と固有名詞が織りなすおとぎ話

むかしむかし、阿波の国・小松島には、賢く勇敢な金長狸が住んでいた。金長狸は人間に恩返しをする心優しい狸として知られ、地域の人々からも慕われていた。一方、勝浦川の下流・対岸にあたる津田山（現・徳島市津田町・津田山周辺）には六右衛門狸という大狸が勢力を張り、周囲の狸たちを従えて大きな勢力を築いていた。

ある年、六右衛門狸は阿波一帯を支配しようと企て、金長狸の勢力に戦いを挑んだ。戦場となったのは、小松島市の田浦・立江、さらに徳島市の津田・論田にかけての地域である。物語ではこれらの地名が戦場の描写とともに語られ、聞き手は自分の知る風景と物語が重なることで強い臨場感を得る。

金長軍は立江寺の裏山に陣を構え、六右衛門軍の進軍を迎え撃った。六右衛門軍は数に勝り、金長軍は苦戦を強いられたが、金長軍は知恵を働かせ、夜の闇に紛れて奇襲を仕掛けた。物語では「立江の松林に身を隠し、月明かりを利用して敵を欺いた」といった描写が語られ、地域の自然環境が巧みに物語の展開へと取り込まれる。

最終的に金長軍は六右衛門軍を討ち果たし、阿波の平和を取り戻したとされる。戦いの後、金長狸は人々から感謝され、祠や碑が建てられた。これが後に金長神社として整備され、現在に至るまで地域の象徴として残っている。

さらに阿波狸合戦には、

・金長と六右衛門の娘・鹿の子の恋愛譚

・金長の世話をした染物商・大和屋への報恩譚などが絡み、複数の物語が重層的に結びついた大きな伝承となっている。



資料：四国放送 HP

3-2-3　市街地に残る狸の痕跡と狸の名前

徳島市内および周辺地域には、狸伝説の痕跡が多数点在している。主なものを挙げると、次のような例がある。

・**津田町の金長祠（徳島市）**：地元住民によって清掃・祭礼が続けられている。横の石碑には金長狸の功績が刻まれている。

・**立江寺周辺の戦場跡（小松島市）**：阿波狸合戦の舞台とされ、郷土史家による案内板が設置されている。

・論田町の狸塚（徳島市）：六右衛門軍の戦死した狸を弔ったとされる塚。生活圏の中に自然に溶け込み、散歩の途中にふと目にすることができる。

およその全体を知るには、昭和期に収集された笠井新也の名著「阿波の狸の話」（※文献参照）に、阿波名狸録として固有名を持つ狸が多数記録されている。郡別の分布は以下の通りである。



資料：鎌谷嘉喜著阿波狸民俗資料集より引用

・徳島市：15 匹
・名東郡：8 匹
・勝浦郡：9 匹
・那賀郡：12 匹
・海部郡：6 匹
・板野郡：20 匹
・阿波郡：8 匹
・名西郡：4 匹
・麻植郡：9 匹
・美馬郡：42 匹
・三好郡：17 匹

阿波の狸伝説には固有名詞が多く残り、それぞれが個性を持つ点が特徴である。民俗学的にも、固有名の多さは物語性の強さを示す重要な指標である。

さらに、鎌谷嘉喜「阿波狸民俗資料集」には「狸番付」が採録されている。ここでは、

・**東西横綱**：金長狸・六右衛門狸
・**東西大関**：赤岩将監・鎮十郎

とされ、他にも衛門三郎、藤ノ木の鷹、鹿の子などの名が並ぶ。番付においても「狸合戦組」が優勢であり、物語性の強さがうかがえる。

3-2-4　主な狸伝説スポット――神社・祠・狸像・絵画

以下に、徳島市内および周辺地域に残る代表的な狸モニュメントを五つ取り上げ、それぞれの特徴を紹介する。

1. **金長神社（小松島市）**：金長狸を祀る神社で、徳島の狸文化の中心的存在。境内には金長狸像、絵馬、由緒碑が並び、祭礼や観光の拠点となっている。
2. **立江寺裏山の戦場跡（小松島市）**：阿波狸合戦の主戦場とされる場所。案内板や碑文が設置され、物語の舞台を実際に歩くことができる。
3. **津田町の金長祠（徳島市）**：地域住民によって守られてきた小祠で、金長狸の恩返し譚に関する碑文が残る。
4. **論田町の狸塚（徳島市）**：六右衛門軍の戦死した狸を弔ったとされる塚。郷土史家の調査対象にもなっている。
5. **小松島市の狸像群**：公園や公共施設に複数の狸像が設置され、地域の物語性を視覚的に伝える役割を果たしている。

3-3　物語性が地域文化力を育む

3-3-1　狸伝説の作品化

徳島・鳴門地域の狸伝説は、単なる怪異譚や民間信仰にとどまらず、豊かな物語性を備えた文化資源として発達してきた。固有名詞を持つ狸たちが地名や寺社と結びつき、地域の歴史や生活文化を象徴する存在となっている。こうした物語性は地域文化力を高め、観光資源や地域ブランドとしての可能性を広げる。狸伝説は徳島の無形の文化資源として、今後も新たな展開を生み出す高いポテンシャル（潜在力）を有している。

3-3-2　ジャンルと作品（小説・民俗学・映像・舞台・絵本・音楽）